

学校再開に向かういまこそ〈自由の相互承認〉を

横浜国立大学教育学部附属学校部

コロナ禍における気づき

3月に突然始まった臨時休業から3ヶ月近くが経過しました。その間、各附属学校の児童生徒及び保護者の皆様には、家庭での学習へのご協力を賜りました。

4月以降のニュースでは、「四六時中子どもと一緒にいるとストレスが溜まる。そう思っただけで…」という保護者のコメントが目にとまるようになりました。この要因には、本来、共感的なケアを中心とした関わりが求められる保護者に、家庭学習の管理や指導をする役割が与えられたからではないかと推察しています。改めまして家庭学習への保護者のご協力に心より感謝申し上げます。

また、多くの児童生徒は、家庭学習において学校と同等の時間は机に向かえなかったと思われまます。至極当然です。なぜなら、学習は一人で行うよりも、友だちと協力してやる方が「楽しい」と感じる傾向にあるからです。とりわけ、どの附属学校でも、他者との関わり合いの中での学びを深めていく実践研究を進めているため、あたたかな対話のない孤独な勉強は、少々辛く感じたかと推察されます。さらに、「自粛」という言葉が「イコール運動をしてはならない」という誤った解釈を生み、身体不活動によって心のモヤモヤを大きくしていたかもしれません。

ともあれ、大切な人とも距離を取らなければならないウイルスの蔓延により、桜や萌黄の美しい季節とはうらはらに、先行き不透明でどこか殺伐とした雰囲気すら感じる社会へと変貌していったようにも感じられました。

他方で、このようなコロナ禍においても、嬉しい発見がありました。

フランスでの医療従事者へのベランダでの労いの拍手は、話したことのなかった近所の方との新たなコミュニケーションを生み、笑顔で朝の8時を迎える方が増えたといえます。

東京で中華料理店を開く中国人店主は、日本への感謝の思いから毎日500食ものお弁当を無料で配付しているそうです。店主には、マスクや野菜、現金の寄付も寄せられるようになり、「コロナが収束したら食べにいきます」というメッセージも送られているとのこと。

大変な状況下において「誰かのために」という行動が、誰かの笑顔を生み、それを見聞きした人も幸福な気持ちにさせているというエピソードです。

「何かをやろう！」という動機（モチベーション）には、「不特定多数の誰かのため」と「自分（の周辺）だけのため」に行う場合とに大別できるでしょう。社会起業家論の専門家である田坂広志氏によれば、前者を「志」とよび、後者は「野心」と区別しています。人間だれしも、自身の発達・成長のためにやる気を出すのは当然です。しかし、過度な野心になると「自分だけよければ、それでよい」という考えに陥りやすいので注意が必要かもしれません。

学校再開に向けて いま求められる公教育の哲学

首都圏の緊急事態宣言の解除がなされました。

いよいよ段階的に、時差・分散登校にて「密閉、密集、密接」の「三密」を防ぎ、「手洗い、うがい、ディスタンス（2m程度、最低でも1m程度の距離）」と「咳エチケット」を合言葉に、学校再開に向けて動き出します。

「With コロナ（コロナとともに生きる）」という時代に入ったと文部科学省も指針の転換をしました。皮膚からは感染しないウイルスであることから、正しく恐れ、適切な行動を実践しつつ、新しい生活様式のもと各附属学校で「楽しい学校生活」を再構築していきます。

さて、改めて、なぜ公教育は必要なのでしょう。教育哲学者の苦野一徳氏は、その答えを次のように述べています。

公教育とは何か。それは一言で言えば、全ての子どもたちが〈自由〉に、すなわち『生きたいように生きられる』ための力を必ず育むためのものです。でも同時に、各人がただ自分のわがままな自由を主張しては、結局のところ争いになって、互いの〈自由〉が奪われることになってしまいます。それゆえ私たちは、この市民社会においては誰もが〈自由〉に生きたいと願っていることを相互に承認し合わなければなりません。公教育は、まさにこの〈自由の相互承認〉の感度を育むことを土台にし、その上で、全ての子どもたちが〈自由〉に生きられるための力を育むことを最も根本的な本質とするのです。

お気づきのとおり、「自分だけよければ、それでよい」という先述の過度な野心は、〈自由の相互承認〉の感度が育まれていない状況だといえます。「With コロナ」の時代、誰もが、〈自由〉（安全・安心）に生活したいのは当然です。

他方で、日本赤十字社によれば、コロナには3つの感染症があるということです。

第1の感染症は、「病気そのもの」です。コロナウィルスは目、鼻、口や傷口等からしか侵入できません。繰り返しますが、「手洗い、うがい、ディスタンス」に「咳エチケット」を励行しましょう。

第2の感染症は、「不安・恐れ」です。このウィルスは見えず、わからないことが多いにも関わらず、テレビやインターネットでの情報が溢れているため、それに振り回され、不安や恐れ連鎖が生じるのだと考えられています。「自分（や周辺の者）だけが生き残る」という過度な野心のために、他者をウィルス感染の可能性がありそうな人と決めつけると第3の感染症を生みます。

第3の感染症、それは「偏見や差別」です。特定の人や地域、職業などにレッテルを貼る心理によって、差別の蔓延が生じます。「差別されたくない（コロナ感染を疑われない）」心理が体調不良のままの登校を誘発するならば、本末転倒です。

問題の元凶は、新型コロナウイルスのはずです。しかし、現在は、第2の「不安」や第3の「差別」の感染の方が大きくなっているようにも思えます。

「不安」を解消するには、安心できる相手と繋がったり、いま自分ができることを認めたりすることが有効です。とりわけ先のエピソードのような「不特定の誰かのため」という志に基づいた「いまここ」への没頭は、自己効力感の発揮につながり、不安を解消・軽減してくれると考えられます。

「差別」はいじめと同様の論理です。生活必須職従事者（エッセンシャルワーカー）や医療従事者等は差別を受けるところか、敬意を払う対象でしょう。フランスのように決まった時間に拍手をしなくてもよいのです。感謝やリスペクト（尊敬）の念を抱くことで差別意識が低減するでしょう。

そして、体調不良時には遠慮なく休み、体調が戻った際には、みんなで明るく迎えられる雰囲気醸成が求められます。

いまこそ児童生徒、教員、保護者の総力で、〈自由の相互承認〉の雰囲気溢れた横浜国立大学教育学部附属学校の姿を発揮するときなのです。

（附属学校部長 梅澤秋久）